

第5回 自立につながるソーシャル・ファイナンス

～国、地域、社会的背景によって異なる様々なかたち

日時：11月20日（水） 午後7時～午後8時30分

会場：龍谷大学 大阪梅田キャンパス 研修室

講師：小吹 岳志

オイコクレジット・ジャパン 事務局長

URL：<http://oikocredit.blog32.fc2.com/>



講座概要

一般的な金融が利息や投資分配を目的として「自らの経済的利益」を求めているのとは対称的に、社会的問題の解決により「社会にとっての利益」を実現しようとする金融活動を進める活動・事業が世界的に広まっています。ソーシャルファイナンスと呼ばれています。この活動の担い手はだれか、どのようにして生まれたのか、誰が受益者か、どれほどの成果をあげているのか。まだ日本では広く知られていないこの活動について、一線で活躍されている小吹さんにうかがいました。

ソーシャルファイナンスの担い手

ソーシャルファイナンスに取り組んでいる機関や、関連する運動には以下があげられます。

- ①オイコクレジット・ジャパンやARUN 合同会社、リビング・イン・ピースなど、主に海外のマイクロファイナンスを扱う団体。
- ②日本に国内に23団体ある市民の出資によるNPOバンク。
- ③ミュージックセキュリティーズや、自然エネルギーファンドなどのマイクロ投資ファンド。
- ④大手の銀行に対して市民が意見を述べたり質問書を出して、武器製造や環境破壊を行っている企業への融資投資をやめさせるように要求する「エコ貯金アクション」を行うA Seed Japan。
- ⑤NPOへの特別融資を実施しているろうきん等の金融機関。

マイクロファイナンスとは

上段に述べたソーシャルファイナンス機関の行う事業の中心にあるのが、マイクロファイナンスです。マイクロファイナンスの典型は、(1)貧困層で銀行口座が持たず、(2)担保価値のある資産を持たない人たちに、(3)小額の貸付を行い、(4)少しずつ多数回に分けて利子・元本を返済させるものです。多くの場合に借り手は女性であり、担保を取らない代わりに村長に個人保証をしてもらったり（その分金利増）、何人かでグループを作って連帯責任で返済させたり、村の集会所で大勢の村人の前で貸付・返済をすることでより確実な返済をめざし、貸し倒れ率を下げる効果をあげています。貧困地域においては男性の借り手よりも女性の方が借りた資金をより真面目に使用することが期待されることや、「村社会」で暮らす人にとっては村での信用の有無が毎日の生活に関わるという社会の特徴をよく利用したしくみとなっています。

ただ、そのままでは借り手側が帳簿をつけられない、字が書けない、数字に弱い、などの事情を抱えているので、彼らを指導するなどのフォロー、バックアップも必要です。

貸し倒れ率の低さはマイクロファイナンスの大きな長所と言えるのですが、一般の銀行がいくら真似したくてもできない理由があります。つまり、村に支店がないのでこれらの人たちと接点を持ってない、銀行口座のない彼らと取引をするノウハウがない、また高コスト体質から小額融資では費用をまかなっていけない、というわけです。

順序が逆になりましたが、マイクロファイナンスの理念は、寄付により一時的な貧困削減支援をするのではなく、借金返済のためにみずから努力させることで自立を促す、というところにあります。

マイクロファイナンスの発祥と発展、現状

マイクロファイナンス運動はバングラデシュでムハマド・ユヌス博士により、農村の小口金融として始められました。その後この運動は大きく発展し、世銀の調査は同国内の3機関の事業により、毎年借り手の3%が貧困状態から脱出し、その波及効果により地域の借り手以外の人でも1%が貧困脱出、累積の効果としては14年間で40%が貧困から脱出した、と報告しています。

他方、マイクロファイナンスにより、経済的のみならず社会的な効果も達成されつつあります。つまり女性の地位と能力が向上し、銀行口座を持たず社会から疎外されていた人たちが社会に組み入れられ、家にとじこもり孤立していた女性たちが協力し合うことでネットワークが作られた、ということです。

現在、マイクロファイナンスの仕組みにより、世界130カ国以上で、1万社以上の機関により、1億5千万人を対象に、3兆円の融資が行われています。

また既にマイクロファイナンス機関は先進国にもあり、ホームレスや低所得者の救済、市民の事業への支援に使われています。例として、日本のNPOバンク、米国のCDFI（政府系）、韓国のグラミン銀行韓国支店等があげられます。

ソーシャルファイナンスによる自立支援の事例紹介

ソーシャルファイナンスの先駆的な団体、オイコクレジットは1975年、世界キリスト教協議会の余剰資金の倫理的な活用のためオランダで発足。事業の原資は、先進14カ国の協力団体からオイコ本部への出資の形で集められています。投融資先としては、マイクロファイナンス機関、フェアトレード企業、生産者団体、協同組合など、世界70か国で展開。マイクロファイナンス機関への投融資残高は民間の機関としては世界最大規模です。オイコクレジットの投融資による様々な事例紹介がなされました。

①カンボジア：現在政治的、社会的に安定しているため、多くのマイクロファイナンス機関が、産業の様々な分野に融資し、利用者数は130万人＝カンボジア総人口の約1割に当たる人数にのびます。オイコクレジットは主要な13のマイクロファイナンス機関に融資し、堅実な経済発展の原動力になっています。

②コートジボワール：180人のメンバーを擁する女性だけの協同組合、ココヴィコへの融資によって、今まで通常の銀行の融資を受けられなかった行商の女性たちに市場を提供。多くの女性の経済的自立につながった様子をビデオで紹介しました。

③ガーナ：62000人の組合員を擁するカカオ農民組合、クアパココ。この組合が提供するカカオを原料に製品を作るイギリスのデヴァイン・チョコレート。オイコクレジットはその生産者と製造・販売者双方に融資を行い、フェアトレードの普及に貢献しています。

④ブルガリア：かつてはコメコンあるいは国家間契約で、出荷先は確保されていましたが、現在は大手穀物商社の買い付けに左右されるブルガリアの農村地域。その農業立て直しのため、生産規模を拡大した協同組合や農業会社に投融資し、増産、自立の手助けをしています。